
自由解放軍

多賀竜騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由解放軍

【ZPDF】

Z0724P

【作者名】

多賀竜騎

【あらすじ】

突然の法律の改正、それによって未成年（高校生以下）は、全ての権利を奪われた。その法律の改正に反対する未成年の少年少女たちは武器を取り、「自由解放軍」を設立して国に立ち向かった。

初めに

え、えーと、どうも多賀竜騎です。なんやかんやでネタ無くなつたので「名桜高校奮闘記」は当分投稿されません。
というわけで、新小説を進行させたいと思います。

私の友人も見てくれていたんですけど、本当に申し訳ないです。
しかし！暇があつたらちょくちょく投稿しますのでよろしくお願いします。

ちなみに、私の書く小説は私の「多賀竜騎」を主人公の名前としてそのまま使つております。
一応、全作品そつするつもりです。

最初に言ひます、私の小説は不定期更新です。
ご了承ください。

～プロローグ～（前書き）

一回目です。
よろしくお願ひします！

「プロローグ」

新西暦1572年、日本では、法律の内容が改正された。

それは、政治の仕組み、営業の仕組み、金銭単位の仕組み、収入の仕組み、社会全体の仕組みが変わってしまった。

そして、最後に目を付けられたものある・・・・・そう・・・・

学生たちである。

学力の向上が一向に伸びない彼等^{がくせい}に刃を向けたのである。

その法律で高校生以下の未成年者の権利を全て奪つた、何かを主張する権利も、さらには人権でさえも彼等から奪つたのである。

しかし、唯一、権利が認められる方法がある。

そう、成績だ。

成績が良い者達は「特校」、通称「特別未成年学校」という場所に移校された。

この特学に行けるのは、中学から成績が2年連続で向上した者である、特学では未成年でも人権といいうものが認められる、それが特学だ。

しかし、成績が悪い者はどうなつたであるだう?

「権利」と言つ言葉が存在しないような世界に取り残されたのである。

そうした彼等を人は皆「無能力者」と呼ぶようになり、迫害した。

～プロローグ～（後書き）

どうも多賀です。

書きかけの小説やめて新しいのを書き始めました。

序章 差別（前書き）

明日は、「モンスター・ハンター・3rd」が発売されますね。

新西暦1572年の法律改正からあつといつ間に5年が経つた、俺はその時中一だった。

その時皆はこう言った

「訳がわからない・・・」

俺もそう言った、皆よく考えてみると、いきなり法律を変えて成績の良し悪しで差別をする。

考えられないだろ？でもそれまでこの日本が甘かったのかもしれない、これが本当の国の仕組みなのかもしれない、そう思うと仕方がないと感じてきた。

しかし、その考えも束の間だった。

成績の良い者は次々と特学に、成績の悪い者は強制学習学校（F-L-S）に残された。

何時しかこの制度は当然のようになり、俺たち無能力者は当然のようには迫害された。^{ロバ}

物を買うにも差別され、話しを掛けることでさえも差別された。そして最終的にはどうなったと思つ？

道を歩く事でさえも許されざる行為になつたのである。

破れば捕まり罰せられる、しかし俺たちには人権なんてものは存在しない、だから弁護されないのである。

弁護士は弁護を頼まれても引き受けはいけない、仮に引き受けれ

ば弁護した者も弁護を頼んだ者も死罪になり一族も皆迫害される。

そんな世界が当然になつたのである、そんな世界が平和だと思うか？

俺は思わない、 いざれこの世界を日本を俺は変えてみせる。

何時だつていいんだ
・・・・・

何時だつて · · · ·

本当に不定期ですみません。

FIRE-1 男の物語（前書き）

3回目ですー遅くなつてすんません！

よろしくお願いします。

FIRE1 男の名前

新西暦1577年、9月1日。

俺は何時ものように、学校に行く準備をしていた。
俺の名前は多賀竜騎たがりゅうき、特校に通う無能力者ゼロだ。

俺の両親は、父親が元「無能力者ゼロ」で。
母親は公務員だ。

俺は母親が公務員だから特校に通わしてもらっている。
ちなみに特校とは「特別未成年学校」の略だ。
父親の事についてはまた今度話そつ。

もう一度説明するが、この日本は身分が区別されて上から
天皇、首相、副首相、政治家、公務員、一般市民（ここでは収入が
ある者を言つ）、学生（特校）、無能力者ゼロ。

この順だ、ちなみに自分の収入が無い者は無能力者に属する。
すつかり話が長くなつちまつた、残念だが俺は学校に行かなきゃな
らない。

俺は何時ものように、支度を済ませると朝食をとり、出発した。
車庫にある自転車の鍵を外し、自転車には乗らず無能力者用道路まで押して行く。
乗れば即逮捕だ。

街はとても綺麗だ。

国民の街は・・・・・

しばらく歩くと無能力者用道路の入り口にたどり着いた。
ここは国道と違つて汚れた道だ、分かりやすく言えば、ビル街の裏

路地のよつな光景だ。

俺は自転車に跨ると自転車をこぎだした、道の片隅にはホームレスが屯している。

このホームレス達は見掛けこそ恐ろしい印象だが、とてもいい人達だ。

「おはよう」やります。」

と俺は自転車を止めて鬚を生やした老人に挨拶をした、

「ああ、おはよう、朝から元気だねえ。」

「学校があるんで、朝っぱらからじんよりしてたら教師に殴られますよ。」

ホームレスは「ははっ」と笑つてぼそりと呟いた。

「昔はワシもその位元気があつたんだけじねえ。」「
とその後に「法律改正がある前はな」と付け加えた。

「法律改正」その言葉を聞いた瞬間、俺は胸が締め付けられた。

「・・・・俺が変えてみせます・・・・この日本を。」

「そつか・・・・夢を持つことはいい事じや、だがその心、決して忘れてはいかんぞ。」

「はい、でも俺はこの事を、只の夢物語で終らせる気はありません。見てて下さい、俺は必ず実現して見せますよ」

俺は振り向きペダルに足を掛けた。

「待つてくれ、君の名前を聞かせてくれないか？」

「・・・多賀竜騎、」の日本を変える男の名前です。」

「多賀竜騎・・・覚えておくよ、何時か君がこの日本を変えた時、私は君に会いに行くよ。その時まで覚えていてくれよ？」

「分かりました、俺がこの日本を変える時まで待っています。そして・・・貴方に神の」加護がありますよつじ。」

俺は老人に向かつて首に掛けた十字架を掲げ、自転車をこぎ始めた。

「ありがとう、世界中の人が君みたいな性格を持つていたらな。」

俺はその言葉を背中で受け、ひたすら自転車を走り進めた。

学校の校門に着いたのは、遅刻ギリギリの七時五十五分だった。校門の前に居た教師が、俺を呼び止めた。

「おひつー多賀！止まれ。」

その言葉で俺は自転車を止めた。

「はいはい、何ですか？公務員の先生が、ゼロの俺に話をかけてくるなんてねえ、なんて光榮だ。」

そう振り向いた俺の頬に拳が飛んできた、俺はそれを寸での所で受け止め、振り払った。

「何ですか？先生、そんなんじゃ俺を倒す事は不可能です。」

「黙れ、無能力者むのうりょくしゃ」が、ゼロの分際で一般市民に、しかも年配の人に向かつてその態度は何だ？」

「何だじゃありませんよ、先生こそいきなり生徒に殴りかかるなんて、世間に知れたら大変ですよ？」

「黙れ！……貴様はこの高校の生徒では無い！ゼロには人権が無いからなあ。」

「そうですか……では先生はゼロはここに居てはいけない、といつのですね？」

「そうだ！！！！正直、俺はお前が嫌いなんだよ……ゼロの癖むしてノコノコと特学なんかに来やがって……！」

俺は冷たい目で先生を睨んだ。

「どうした……その目は……ヤレルもんならやつてみな……」

「敗者ひしゃツ……いや？負け犬とでも言つておこつか？とにかく貴様に用は無い。」

俺は振り返りそのまま歩き出した、

「おー！……ゼロの癖に逃げるんじゃねえよ……！」

「黙れ負け犬、もう一度言つ、貴様に用は無いと……」

俺はそのまま玄関に向かつて歩いていった……

俺の日常せいかつが始まる、しかし、いたな日常せいかの機械と同じ
よつな日常だ。

毎日同じ行動をして、つまらない日常を廻らして暮らす。

そして、つまらなく死ぬ・・・・

俺はそれだけは一番嫌だ、必ず変えて見せる・・・・
このつまらない奴隸のよひな日常を・・・・

FIRE1 男の名前（後書き）

誤字脱字などがいましたら、教えていただけたら嬉しいです。

FILE2 仲間と敵（前書き）

久しぶりの投稿です！

まあ、長い目で見守つてください。

午前8：00

竜騎は、教室の近くを歩いていた。

竜騎は2年D組の生徒だ、そして、その2年D組は40人学級、その内の内、俺を外して14人が親など身分関係で、特学に通っている無能力者だ。

他の25人は紛れもない、学生だ。

「廊下にワイヤー、50センチ間隔」

竜騎は学生が仕掛けた、通称「無能力者トラップ」に掛からないよう警戒しながら歩く。

「教室に到着、ドアにトラップが2パターン、その壱、黒板消し。その弐、水入りバケツ」

そう呟くと、ドアに挟まっている黒板消しを外す。

そしてドアを蹴破った、すると仕掛けたバケツが落ちてきて教室の床に水が撒かれた。

大抵の学生は「ちツ！」「クソツ！」などの悪態をついてくる。だが竜騎はそんな事は構いもせずに、

「このバケツと水は、教師が来る前に片付けておいたほうが身のためだと思いますよ」

と言いながら自分の席についた、クラスといつても竜騎たち無能力者は、教室の窓際の隅に、離れ小島のように区別されている。

竜騎達の席は3×5の長方形型で構成されている、そこで竜騎は一番真ん中の席だ。

何故なら、学生といつ自分達より上の身分に、唯一立ち向かつたり、喧嘩をして勝利をする。

いわば、英雄扱いだ。

皆は竜騎をリーダーとしている、もちろん学生達は竜騎を畏れている。

「おい、竜騎。相変わらず俺と違つて、お前は用心深いな」

「違つよ、兄さん、そつでもなくつちや僕等のリーダーは務まらないもの」

竜騎は、中学からの腐れ縁、野田和良のだかずよしとその弟の政良まさよしに声を掛けられた。

「違つよ。俺が用心深すぎるんじゃないくて、お前が用心深くなさ過ぎるんだよ」

「あつ！お前そんな事言つ까！酷過ひどくすぎるぞ！竜騎！」

「兄さんー落ち着いて！落ち着いて！」

和良が、俺に飛び掛るのを、政良が必死に止めるのを横よに、竜騎はバッグの中身を机にぶちまけた。
机の上には各教科の教科書、ノート、筆箱といった学生の必需品の他に、竜騎はバッグ底を剥がした。

そして取り出したのは、拳銃の弾倉だんそう一つ、そして弾倉が入つていない、SIG P220を取り出した。

竜騎は、周りの目を気にせず、SIG P220に弾倉を入れてスライドを引いて弾を装填して、いつでも撃てるよにして、腰のベルトに差し込んだ。

「ていうか、竜騎？お前、何故ゆえにいつも拳銃を持ち歩いているんだ？」

「兄さん、大体護身用で持つてるんでしょ？でも銃刀法違反にならないのかな？大丈夫なんですか？竜騎さん」

「ああ、大丈夫だよ。だって良く考えてみろ、俺達には今、人権がないんだぞ。要するに、一般市民の扱いを受けないんだ。だから銃刀法も無縁なんだよ」

「ああ！ そうか、じゃあ俺も手に入れたいなー、アツ！ そうだ竜騎！ お前拳銃俺の買ってきてよ、金払うから」

「馬鹿かお前は、俺の拳銃は買ったんじゃなくて、俺の親父の形見なんだよ」

「ああ、そうか・・・そついえば、お前の父親って・・・」

和良は言葉を詰まらせた、竜騎は和良が氣を悪くしないように、元気を掛けようとした。

しかし、教師が入ってきたためみんなが席に戻った。

「さあ、今日もささやかな戦争の始まりだ」

竜騎は小声で小さく呟いた。

FILE 2 仲間と敵（後書き）

誤字脱字があつたら、「」報告してください。

FILE3 父親の過去（前書き）

やつとの投稿です！

「えー、こここの問題……」

今は3時間目の真っ最中、竜騎は暇な時間を和良とチエスをして潰していた。

戦況は竜騎かケイーンか――ボーンか――ルーケか――にキン
グが一つ。

勝た

普段の和良は、ゲーム事などは負けそうになると、直ぐに降参する性格なのだが、今日は違う。

性情がのけだす。今日に逢ふ

なせなり 金を熙けていふからである

「つるさ」！お前が俺の金を狙つて、賭けチェスやろいっていったんだろ」

「頼むよ！この三千円盗られたら、俺の財産が～！」
「残念だつたな、チイツクメイト」

! ! !

和良が悲痛の叫びを上げているのを無視し、竜騎は机の上に置いてある和良の三千円と自分の五千円を回収した。

「おい、利良、俺が金を貰いたいんだから、家は来て俺の手伝いは協力してくれたら、金をやるよ」

二木に田總方

竜騎はチェス盤の上に置いてある、白と黒の駒を分けて自分のバッ
グにしまい込んだ。

それを見つけた教師が、竜騎の席まで行き、怒鳴り声を上げた。

「何やつてんですか！無能力者は少しでも成績が上がつて、一般人になれるよう努力しなさい！」

その言葉に竜騎は舌打ちをして立ち上がり、教師と向き合つた。

「一般人になれだと？誰のせいで無能力者になつたと思ってんだ！貴様等大人のせいだろ！」

竜騎は逆に怒鳴り返した、その声にびっくりして、教師はブルッと肩を震わせた。

しかし、教師は負けずに言い返した。

「勉強と努力を繰り返せば、なれない訳が無いんです！」

「なれない訳が無いだと・・・、そつかお前は知らないんだな・・・」

「しらない？・・・何のことですか？」

竜騎は、目の前で口をポカンと開けている教師に、再び舌打ちをした。

「知らないようなら教えてやる、俺の父親の名前は、たが ほうと多賀鵬斗」

竜騎がその名前を口にした途端、教師の顔が青ざめた。

「鵬斗・・・つて・・・あの・・・反政府テロ組織「零解放組織」総裁、多賀鵬斗！？」

「そうだ、これで分かつたな？」

「でも・・・そんな危険人物の血族が、どうしてここに？」

「俺のことを哀れんだ母親が、縁を切つたのさ、だから正式には親子ではない」

「けれども、俺は・・・俺は父さんを・・・鵬斗父さんと縁を切つたなんて思わない。」

竜騎はそう思つて拳を握り締めた、そして沈黙が続いた。

～～夕方～～

竜騎は、いつもとは雰囲気が少し違つた帰路についていた。

何時もなら、警備員が居る筈の通常道路も、竜騎以外の人間は一人

も居なかつた。

その後に、朝にホームレスと会話をした場所を通りたが、そこには一人の怯えた様子でうずくまるホームレスが居た。

竜騎はそのホームレスの元まで歩み寄った。

「おい、大丈夫か？寒いのか？」

竜騎がそう話し掛けると、ホームレスは顔を上げて、俺に向かつて泣き喚いた。

「助けてくれ！――命だけは見逃してくれえ！――」

ホームレスは酷く混乱していた、竜騎はホームレスに顔がよく見えるように話しかけた。

「おい！どうしたんだ？他の人達は？」

俺だと分かると、泣くのを止めて、俺に話した。

「なッ！・・・」

竜騎は絶句した、そして胸の十字架のペンダントを握り締めた。

「……………そんな……………おい！何があつたんだ！」

たちを撃ち殺したんだ・・・」

「それで…その後は！」

その後は、死体を片付けて、笑いながら帰つて行つたよ。

その後、竜騎は昔よく遊んだ公園に来ていた。

そこには、とても見晴らしがよく、この街が一望出来た。

くそつ！ 何でだ？ 俺たち無能力者の何が悪い！ ？ 俺たちは、只幸

ああああああああ！ ！ ！ ！ ！ ！

竜騎のなんの意味も無い叫びが、街に響いた。

只、
それだけだった・・・

FILE 3 父親の過去（後書き）

これからも、ぼちぼち、投稿していきたいです！

FIRE 4 無意味な死（前書き）

やつとです！

多分、月1程度で投稿できるよつ頑張ります！

FIRE 4 無意味な死

PM7：00、竜騎は自宅の玄関前に居た。

その顔には、涙の跡があつた。

竜騎が玄関の扉を開けて、中に入ると、家の中は、肉が焼ける良い香りが漂っていた。

竜騎がその香りに、ボーッとしている。

「あれ～、だ～れ～？つて、なんだ竜騎か」

と、キッチンの方から声と共に、黒髪のボーネーテールをした少女が顔を出していった。

「あ・・・」

竜騎は少しだけ驚いたが、直ぐに笑顔を見せた。

偽の笑顔だとばれないように、必死に。

「なんで、お前がいるんだ」

「竜騎のお母さんに頼まれたんだ、今日は仕事の都合で帰れないんだって、だから家の鍵を借りて、竜騎のご飯を作っていたんだよ」「それはありがとう」

少し間を置いて、

「麻衣」

そう呼んだ、この少女は秋里麻衣あきさとまい、無能力者だ。

竜騎の幼馴染で、竜騎の母親が帰れない時などに、鍵を借りて竜騎の面倒を見る。

竜騎にとつては幼馴染だが、どうやら麻衣は我が子のように竜騎を見ている。

「ねえ、竜騎。ご飯にしますか？お風呂にしますか？それとも・・・

・・・

「さて、風呂に入ろうか」

竜騎は麻衣の横を通り抜けて、風呂場に向かった。

「あー！もう！まだ最後の一つを言つてないよ！」

麻衣がそう叫ぶが、竜騎はスルーした。

～風呂上り～

竜騎と麻衣はリビングで食事をしていた、今日の食卓は麻衣が作ったメニューだ。

「そういえば今日、警備員がおつきい袋を5～6個を持ってどこか歩いて行つたけどなんだつたんだろうね」

麻衣がふとそんなことを言つてきた、竜騎はハツとした。

「なにっ！」

突然竜騎はテーブルを叩いて立ち上がつた、麻衣は驚いて箸を落とした。

「おいつ！ それはこの番地の警備員か！？」

「えっ？ あつうん、確かそうだつたよ」

竜騎は拳を握り締めた。

「クソッ！ やつぱりあいつらが！ あいつらが殺つたのか！」

竜騎は壁を殴つた。

「竜・・・騎？ 何かあつたの？ 泣きながら怒つて」

麻衣に言われふと我に返つた、目からは涙がこぼれていた。

「今日、私が見た事と竜騎が泣いていることは、何か関係があるの？」

「実は・・・・・今日、ホームレスの人達が数人殺されたんだ」

竜騎は今日あつた事を話した、警備員が殺したこと、そしてその袋の中身がホームレスかもしれない、ということ。

竜騎は話している途中で、温かい飲み物と食パンと毛布を持って、外に飛び出していった。

数分すると、裏路地に着いた、竜騎は裏路地に入つていった。

「誰だ！」

そう叫ばれたのと同時に、ゴリの山から鉄パイプを持つた男が出てきた。

「俺ですさつ キの」

しばらくホームレスは警戒していたが、思い出したのかその場に崩れ落ちた。

「大丈夫ですか！？」

竜騎が駆け寄ると。

「大丈夫だ、ちょっと安心しただけだ」「と言つて近くにあつたゴミ袋に腰掛けた。

「おじさん、これ少ないけれど」

そういうつて持ち物を差し出した、ホームレスはそれを受け取ると、また泣き出した。

「ありがとう、こんな私のためにここまでしてくれて」「いいんですよ、それにあなたは立派な一人の人だ、無能力者なんかじゃない」

「ありがとう・・・本当にありがとう」

竜騎はその場から立ち去つた、そして家の前まで来た所で、突然一発の銃声が聞こえた。

「！？」

竜騎は腰からSIG P220を取り出すと、音がした方に走り出した。

しばらくすると、先程のホームレスが血だらけで倒れていた。

そして、竜騎は見た、その場から歩いて立ち去る、警備員の姿を。

「くそおおおお！？」

竜騎は叫んで引き金を引いた、銃声と同時に、警備員は走り去つた。

「おじさん！」

竜騎はホームレスの元に走りよつた、竜騎がホームレスを抱きかかると、ホームレスが目を開けた。

「グフウ・・・ああ、君か・・・大丈夫か？・・・」

「何言つてるんですか！！おじさんこそ大丈夫ですか？」

竜騎はそう言つたが、全然大丈夫では無かつた。

ホームレスは左胸を一発撃たれていて、それは恐らく心臓に当たつ

たものと考えてもいい。

それはすなわち、助からないと言つことだつた。

だが竜騎は焦つていた。

「とにかく、病院に行きましょう！今救急車を呼びますから！」

竜騎は携帯を取り出し、119番に掛けた。

『はい、どうかしましたか？』

「おい！助けてくれ！人が撃たれたんだ！」

『分かりました、患者の身分を証明できるものはありますか？』

それは市民か無能力者かを、確認するための質問だつた。

「くつ！あ・・あるわけ無いだろ！無能力者のホームレスなんだから！』

『無能力者の場合は、保健所に連絡をしてください』

「くそ！」

竜騎はそう言つて、電話を切つた。

「君・・・もういいんだよ・・・私はもう・・・十分に生きた・・・

・・・

「何言つてるんだよ！人だろ！一人の日本人だろ！」

「私は・・・・・私が生まれ変わつた時は・・・・平和な世の中に・・・・なつてているのだろうか・・・・

「ああ、なつている！俺が変えてみせる！だから死ぬな！」

「ああ・・・君の夢が・・・・叶う・・・・ようにな・・・・そして・・・

他の人を・・・・無能力者を救つて・・・・やつて・・・・く・・・・れ・

・・・

そう言つた瞬間、手を握つていた力が抜け、ぐつたりしてホームレスは動かなくなつた。

「おい！おじさん！おい！くつ・・・・クツソオオオオオオオオ――！」

「！」

竜騎の叫びが裏路地に響き、
住宅街に響き、
そして麻衣の耳に届いた。

満月だった。

空は・・・・・月は・・・・・

FIRE 4 無意味な死（後書き）

まあ、兎に角早めに投稿出来たらいいな～

FIRE5 夢（前書き）

投稿だけども、ストックがあるから、安心だ

午後十時、竜騎は自室のベットに腰を掛けていた。

あの後、銃声を聞きつけた近所の人が、警察に通報した。

竜騎は無能力者だったので、警察に目を付けられるのは不味い、だからホームレスを棄てて逃げた。

「クソッ！」

竜騎は悪態をついた、それと同時に部屋の扉が叩かれた。

「入つていいぞ」

そう言つと、扉が開かれ、麻衣が入つてきた。
麻衣は竜騎の家に来ると、大抵泊まっていた。
麻衣は少し様子が変で、下を向いて俯いていた。

「どうした？ 麻衣」

竜騎がそう呼びかけた。

「えつと・・・あの・・だ・大丈夫かな～？ つて」「何がだ？」

「さつきの警察つて、竜騎が原因なんでしょう？」

「・・・・・ああ」

少し間を置いて、竜騎は答えた。

「ホームレスのおじさんは？」

「・・・・・・くれ」

「えつ？」

竜騎が何かを呟いたが、聞こえずに聞き返した。

「聞かないでくれ・・・」

竜騎の心の中は、ものすごく複雑で、なによりボロボロだった。

「分かつた、ごめんね、竜騎」

「・・・・ああ」

竜騎は寂しげに、そう答えた。

「じゃあ、私もう寝るね」

麻衣はそういうつて扉を閉めようとした。

「おやすみなさい、竜騎」

扉が静かに閉められた。

「ああ・・・おやすみ・・・」

竜騎は電気を消して、ベットに横たわった。

そして今日あつた事を思い返してみた。

朝、ホームレスのおじさん達と話しをした事。

教師に殴られそうになつた事。

何時もとまったく同じ生活・・・生徒が仕掛けた罠を回避した事。

和良とチエスをした事、教師に父親の存在を知らせたこと。

父親、多賀鵬斗。

ホームレスのおじさん達が殺されたと聞いて、公園で叫んだこと。

そして、田の前でおじさんが死んだ事。

これは全て、今田一田であつた事。

「すまない・・・おじさん・・・」

竜騎は押しつぶされたような声を出した。

そして、また涙が流れた。

ふと竜騎はカレンダーを見た、日にちは六月九日。

「あの日まで、あと一日か

そう呟くと、竜騎は静かに田を閉じて、眠りに落ちた。

竜騎は夢を見た、それは懐かしい思い出の夢。
そして、竜騎の運命を変える思い出の口。

あの・・・あの六月十日の出来事の夢を。

新西暦1573年、法律改正が成されてから一年が経つた。
そのころは、まだ緩く、何時もと変わらない日を送っていた。
竜騎の父親は、法律改正に異を唱え、デモ活動をしていた。
母親は、普通に仕事に行っていた。

竜騎はその日、何時ものように友達と皆で下校していた。

下校の途中に、パトカー や救急車のサイレンが鳴り響いていた。

竜騎は火事か何かだと思い、気にも留めなかつた。

その時、警察の車両が竜騎達の横に止まり、声を掛けてきた。

「君達！ すぐに家に帰りなさい！」

「えつ、何かあつたんですか？」

竜騎は警察官に質問した。

「今、街でデモ活動をしていた総勢420人が暴徒化したんだ」「暴徒化って？」

「市民が武装して暴れているんだ、直にここも荒れるだろ？」

「それは、どの辺りで起きたんですか？」

「第二相模市辺りだ」

「なんだつて！？」

竜騎は声を張り上げた、なぜなら竜騎の祖父母は、そこに住んでいたからだ。

「じゃあ、お巡りさん！ 『木漏れ日園』 といつ、老人ホームまで乗せて行ってください！」

「ええ！？ だめだ、あそこは特に危険な・・・」

「それでも、行きたい！ 行かなきやだめなんだ！」

竜騎は叫んで訴えた、警察官は竜騎のあまりにも必死な願いに負けた。

「いいだろう・・・乗りなさい。その代わり、危なくなつたら直ぐに引き返すぞ」

「えっ？あ、ありがとうございます！」

そう言つと、竜騎は直ぐにパトカーに乗り込んだ、竜騎の祖父母は彼にとつて特別な存在だつた。

何故かといふと、竜騎は幼い頃から、祖父母の家で育つた。竜騎の母親は仕事で何時も居なかつた、それに父親も日本のあらゆる政策の問題を指摘していた。

竜騎の世話は何時も、祖父母の役目だつた。

竜騎にとつての祖父母は、親のような存在だつたのだ。

だから、竜騎はここまで必死だつたのだ。

「よし、ここから第一相模市だ。気をつけろー」

「は・・はー！ー！」

竜騎の足は震えていた、とても怖かつたからだ。

しかし、竜騎の恐怖も、これから真の恐怖に変わることを、まだ誰も知る由も無かつた。

竜騎は目を覚ました、起き上がろうとするが異変に気づき掛け布団をめくる。

そこには、麻衣が寝ていた、恐らく夜中に忍び込んだのだろう。

「まつたく・・・」

竜騎はそう呟いて、ベットから出た。

着替えを済ませて、部屋から出ようとした時。

「ん・・竜騎・・・」

麻衣が寝言を言つてきた、竜騎は細く微笑んでから。

「おはよつ、麻衣」

そつ然と、扉をそつと閉めた。

FIRE5 夢（後書き）

次回予告

「FIRE6 一般人と無能力者」

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724p/>

自由解放軍

2011年12月1日18時52分発行